夢色ビーダマ

みつら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢色ビーダマ

【Ｎコード】
Ｎ１１３４Ｏ

【作者名】
みつら

【あらすじ】
主人公・圭祐はある日、不思議な夢を見る。どこまでも白い空間、アンティークの置かれた部屋、その部屋の住人らしき一人の男。圭祐を取り巻く謎が、その男の見せる”夢”によって次第に明かされていく。

白の空間（前書き）

文化祭で展示していた作品です。

白の空間

――ここは、どこだ。

俺は、真白な水の中に浮かんでいた。
立ち上がると、さほど深くはないのだろう、腰の辺りまでしか水に浸からなかった。
辺りを見回すが深い霧が立ちこめていて何も見えず、その白い海がどこまで続いているのかもわからなかった。
これは夢の中だ、と思った。夢である割には意識がはっきりしていたが、その疑念を打ち負かす程に俺の頭が訴えるのだ。これは夢だ、と。まるで警告音のように。
何かしらの刺激があれば起きるかもしれない。そう思って自分の頬を強く引っ張ったが、鈍い痛みが走っただけだった。…そう、痛かったのだ。

――これは、夢じゃない？

俺はますます困惑した。夢じゃないのだとしたら何があるのだろう。答えなどわかっていた。しかし、俺の頭はそれを認めようとしない。
一体どうしたというのだろうか。
そうしている内に頭が痛くなってきた。
痛みで強く閉じていた瞼を開けば、辺り一面に広がる白に頭がぐらりと揺れて視界が廻った。
そのときだ。

――夢だよ。これは君が見る夢。

突然頭の中に直接声が響いてきた。ぐらぐらと揺れる頭に、その柔らかな声はすんなりと侵入してきた。

――これは、僕が見せる夢。君が一番に望む夢。僕が君にで…る、さ…しょで…いごの…

声は次第にノイズのようなもので掻き消されていき、完全に消え去るのと同時に、俺の意識もまた、ふつりと途切れてしまった。

◆◆◆

気がつけば、先程までの浮遊感は無くなっていた。辺りを見渡せばそこは白い海ではなく、部屋の中だった。

ところどころにアンティークと呼ばれるものが置いてあり、チェス盤を模した机や宝石を填め込んだくるみ割り人形など、それらのアンティークはどこか俺を安心させた。

俺が寝ていたのは革張りのソファだった。足がゼンマイのように丸まっていて、これもまたアンティークと呼ばれるものの一つなのだろう。

そんなことを考えていると突然背後から男の声が降ってきた。

「起きたみたいだね」

驚いて振り向けば、ティーカップとポットを乗せた銀のトレイを手に持ち、心配そうにこちらを覗き込む青年の姿があった。

見覚えがない。…はずなのに、どこか懐かしさを感じさせる青年だ。会ったこともない。声だって、聞いたこともないはずなのに。

「誰だ、お前」

苛立ちを感じて思わずぶっきらぼうにそう訊いてしまい文句の一つでも言われようかと思ったが、予想に反してその青年は実に素っ頓狂な答えを投げかけてきた。

「え、僕？　僕は…潤だよ」

「名前は訊いてない」

はあ、とため息をついて、のほほんと笑顔を湛える青年を呆れ顔で見た。

「お前は何者なんだって訊いてるんだよ」

「んー、僕もわかんない」

「あっそ」

阿呆らしい、と思った。何度訊いたところでこの青年には答える気など無いのだろう。

しかし、逆に怪しい。子供のような応答をして、俺を騙そうとでもしているのではなかろうか。やはりそう簡単には信用できないだろう。そもそも第一に、何故俺はこんな所にいるのだろうか。

――誘拐？

まさか。俺を誘拐して何になる。

でも確かに俺は久しぶりの休日に何処かへ出かけていたはずだ。さて、何処だったか…。

思い出そうとして、ずきん、と頭の奥が痛んだ。
う、と呻いて頭を抱えると、青年が、ふ、と笑った気配がした。
「お前…俺に何をした」
床に蹲りながら、睨みつけるように青年を見るが、前髪に隠れて彼の様子を覗うことはできなかった。
「僕は何もしてないよ。望んだのは君だ」
す、と青年が差し出したのは青く澄んだ、空色のビー玉。
「見せてあげるよ、君が望むものを……」
その言葉を最後に、俺の意識はまた、ふつりと切れてしまった。

空色パティシエ（前書き）

文化祭で展示していたものです。

空色パティシエ

俺はまた、あの浮遊感に捕らわれていた。
そのままその感覚に酔い痴れていると、脳内に直接に情景が浮かび上がり、声も流れてきた。まるで映画館のスクリーンの中に入ってしまったような、そんな感じだった。
一人の男が映像の中に現れる。潤とはまた違うけれども、どこか懐かしい雰囲気のある男だ。
どうすることもできない俺は、しばらくその映像を見ることにした。

◆◆◆

菓子を作るのが、好きだった。
俺が菓子を作ると皆が笑顔になるから。

いつからだろう。俺が皆に菓子を作らなくなったのは…。

「…あき、晴見、おい、大丈夫か？」

友人に名を呼ばれ、はっと我に返る。飲んでいるとはいえ、自分の世界に入りきってしまうとは情けない…。

「すまん、昔の事を思い出していた」

晴見。晴れを見る、と書いて「はるあき」と読む。両親の名前にそれぞれ季節の名前が入っているからと言ってつけたような、なんと

もふざけた名前だ。
そういえば、両親とは最近全く会っていない。毛嫌いとまでは行かないが、正直言って好き好んで会いに行きたいとも思わない。
でも、子供の頃の俺は両親が大好きだった。そんな自分が彼らを嫌うようになったのは高校生の時からだったか。

俺はパティシエになりたかった。昔から菓子を作るのが好きで、いつかケーキの城を作るのが夢だった。けれども、両親は俺が専門学校へ行くことに大反対した。

「男がケーキの城を作りたい？　みっともないこと言わないでちょうだい。アンタにはね、たくさんの学費がかかっているのよ。さっさと良い仕事に就いて、どんどん出世して、親孝行してもらわないと困るのよ。ねぇ、アンタ、わかってる？」

俺は何も言わなかった。父を見れば、自分と同じように無言でいたが、それは母の考えに同意ということだ。
俺は唇を強く噛んだ。がみがみと煩い母親、何も言わずに見ているだけの父親。うんざりだった。
でも、そんな親でも、自分を今まで育ててくれた人達だ。二人の言うことを無視することはできず、高校を卒業してそこそこの大学を出て今最も景気のいい大手会社に勤めた。
今でこそ全て俺のためだったのだと思うけれども、かと言って二人に何の用も無しに会いに行けるほどの暇はなかったし、今更会いに行く程の気力もなかった。

「ただいま」

がちゃ、と玄関の扉を開けると、そこは無人だ。
俺は、独身だった。結婚なんて一度も考えたことがない。だから、

毎年のように見合い写真が叔母から送られてきたりもしているのだけれど、全て丁重にお断りしている。が、俺ももう年だ。いい加減、結婚を考えなければならない年齢だろう。

「良き伴侶を見つけなければ、ってか？」

冷蔵庫を開けて缶を一つ取りだす。ぷしゅ、と小気味いい音を立てて缶を開ければ、安っぽいビールの匂いが辺りに広がった。

正直言って、色恋沙汰への興味など、青春と共にどこかへ置き去りにしてきてしまった。興味があるのは、いかにして仕事と趣味を両立させ、時間を有効に使うかということぐらいだ。最近俺は地域でやっている菓子作り教室に通っている。元々いつかは誰かに教わりたいと思っていたし、仕事にも慣れて落ち着いてきた自分にはちょうど良かった。

その教室は月に二回。先週行ったはずだから、次回は来週の日曜日だったはずだ。

確認しようとテーブルの上の卓上カレンダーを見て、はたと気付く。

――そういえば、明日は母さんの誕生日か…。

慣れない仕事に追われ、他人の誕生日は愚か、自分の誕生日さえも気にしている余裕はなかった。

缶を傾けていた手を止め、カレンダーを見つめる。

二人は今、どうしているんだろう。

柄にもなく、帰りたい、と思った。同時に、やはりあそこは自分の故郷なのだと思い知らされる。

俺は手に持っていた缶をテーブルに置き、よし、と呟いて立ち上がった。

◆◆◆

「うん、上等」

薄黄色のクリームを口に含むと、控えめな甘さとほんのり香るレモンの酸味が口内に広がる。

あとは昨日仕込んでおいたパイ生地にこのカスタードクリームと砂糖漬けにしたリンゴを乗せて焼くだけだ。

ちゅん、と雀が鳴くさわやかな休日の朝、俺は珍しく早起きをしてアップルパイ作りに励んでいるのだった。

綺麗にデコレーションをした後、オーブンにそれを入れる。焼いている間に俺は受話器を取り、久しぶりに押す番号を手帳片手に確認しながら入力する。

ぷるる、という機械的な音の後、懐かしい声が鼓膜を震わせた。

「もしもし」

「久しぶり、母さん、晴見だよ」

「あら、元気にしてたのね、よかった」

電話しても仕事でいないし、中々連絡をよこさないから、心配してたのよ、と受話器越しに聞こえてくる声は本当に嬉しそうだった。

「明日、そっちに帰ろうと思うんだけど、いいかな？」

「特に出掛ける用事は無いから、大丈夫よ」

懐かしい声を聞いて、ふと地元の風景を思い出す。じわり、と胸の辺りが温かくなるのを感じて、腹の奥底に何かがこみ上げてきた。俺はそれが溢れだしてしまいそうになるのを必死に抑えながら話を続けた。

「わかった。じゃあ、明日の昼頃にそっちに行くから」

それから三〇分程、他愛もない話をしてから、名残惜しく感じながらも電話を切った。

昔と何も変っていなかった。声は少し掠れが混じっていたような気がしたけれど、話し方も、笑い声も、口癖も、何一つ変ってはいなかった。

でも、故郷はどうなのだろう。やはり何年もの時を経て、変ってしまったのだろうか。そして、自分自身も。

俺は考えを振り払うように軽く頭を振って、芳ばしい香りを漂わせているアップルパイの様子を見に、台所へと向かった。

◆◆◆

「懐かしいな」

翌日、俺はかつての故郷に思いを馳せて、その地へと降り立った。電車を乗り継いで着いたそこは、当時の面影を感じさせないほどに変っていた。駅員室と改札ぐらいしかなかった小さな駅は拡張され、

自販機やコインロッカーが設置され改札を出れば銘菓の店が数軒か並んでいた。駅前通りも車の交通が多くなり、人通りも増えたような気がする。
それでも懐かしさを感じさせるのは、子供時代によく遊んだ公園やよく通っていた駄菓子屋が当時の面影のまま残っているからだ。
俺はかつて歩いた実家への道を踏みしめるように歩いた。
昔ながらの洋食屋の前を通り住宅地の庭に飾られた花々を見ながら、進んでいく。突き当りには、「自動車に注意！」と書かれた看板。
友人と遊んではよくこの看板に悪戯書きをして怒られたっけ。
感傷に浸りながら角を曲がると、目の前に、車。油断していた俺はどうすることもできず、提げていた箱を、ぎゅ、と抱えて目を瞑った。
どん、という衝撃の後、体中に鈍い痛みが走り、俺の意識は沈んでいった。

◆◆◆

目を開いてまず目に入ったのは白い天井だった。次第に意識がはっきりしてくると、すすり泣く声が耳に入った。
俺は気を失っている内に病院へ運ばれ、今はベッドに寝かされているようだ。母がベッドに倒れこんだようにして伏せていて、その傍には父が俯いたまま立っていた。
声を掛けようと口を開いた瞬間、伏せていた顔を上げた母の金切り声が耳に響いた。
「どれだけ私達が心配したと思っているの！」
叫んだ次の瞬間、母はぼろぼろと大粒の涙を流していた。

「お前が生きていて、本当に良かった…」

絞り出すようにして出された声に、胸が苦しくなった。

苦しみを紛らわすように辺りを見回して、台の上に乗った、角のへこんだ箱を見つけた。引き寄せてその箱を開けてみると、中身は形を保ったままだった。

――そうだ、俺はこれを母さんに…

「母さん、これ、食べてよ」

母は驚いたように顔を上げ目を見開くと、愕然とした表情で言った。

「アンタ、何考えてるの。そんなもの今食べられる訳ないでしょう！」

「食べてやりなさい」

母の肩に優しく手を乗せながらそう言ったのはいつも寡黙な父だった。

「お前のために、晴見が作った。命懸けで守った。お前が食べてやらなくて、誰が食べてやるんだ」

父の低く、しかし優しい声音が心地よく耳に響く。

それを聞いた母は、手にあった箱を取ると、中のものを取り出した。

アップルパイの芳ばしい匂いが病室いっぱいに広がった。昔、よ

く母と作っていた、アップルパイ。もう昔と同じ味ではないだろう。
でも、そこに込める気持ちはいつになっても、変らない。

「母さん、食べて」

母は一つ頷くと箱の中に入っていたプラスチックのフォークを取ると一口、口に運んだ。

「美味しい。美味しいわ、晴見」

母はそう言って涙を流しながら、昔のように微笑んだ。

『ありがとう、母さん』

いつまでも変らない言葉が、胸の奥に染み込んだ。

◆◆◆

ふつ、と映像が途切れて辺りを見回せばまたあのアンティークの部屋に居た。潤の姿はなく、一人、ソファに腰掛けているとどこからともなくころころと何かが転がってきた。
飴色の、ビー玉。
俺は先程見たアップルパイにどこか懐かしさを感じながら、また訪れるであろう浮遊感に身体を委ねるように瞳を閉じた。

飴色シンガー（前書き）

文化祭で展示していたものです。

飴色シンガー

『好きだ』

それは突然の告白だった。

◆◆◆

私は歌手をしていた。

昔から歌うのが大好きで、親が歌を大好きだったせいもあるのだろうけれど、それ以上に社長曰くセンスがあるのだそうだ。これは驕りのように聞こえるかもしれないが、私はそれを社長から聞いた時とても嬉しかった。自分の声を、歌を認められたことが。

私は歌い続けた。何枚もミリオンセラーのＣＤを出したし、大きなステージでのライブなんてざらだった。

そしてある時突然、耳が聞こえなくなった。本当に音そのものが聞こえなくなったのだ。もちろん、自分の声さえも。

それでも私は歌い続けようと必死だったが、遂に社長に退職を宣告された。まるで階段を転がり落ちて行くような気分だった。社長室を出てからも私は茫然としながら歩いていた。

気付けばそこは会社の屋上だった。珍しくフェンスの無い屋上では外の景色が良く見えて、夕暮れ時の街の風景はとても綺麗だった。

――この街と一緒になれたらいいのに。

そう思うと、自然と足が動いた。少しずつ、街の風景が近づいてくる。不思議と、怖くはなかった。
あと一歩で屋上の端まで辿り着くところで、ぐいと引っ張られ、私の身体は後ろに倒れていった。
予想していた衝撃はなくて、驚いて起き上がろうとしたら不意に強く抱き締められた。
その人は何か言っているようだったが、言葉通り、私の耳に届くことはなかった。

ふわりと香る、甘い匂い。
それだけでわかった。マネージャーだ。
彼はいつも傍にいて、私を支えてくれた。優しく声をかけてくれた。悩み事がある時は親身になって一緒に考えてくれた。それが、私にとってはとても嬉しかった。
私についてくれたマネージャーは何人もいたが、どの人も媚びるような接し方しかしなかった。大抵の人は何か問題を起こして、会社を辞めていった。
新しいマネージャーが来ると聞いて、またすぐに駄目になるのだろうと思っていた。しかし、初めて彼を見た瞬間、予感のようなものがあった。この人なら大丈夫だ、と。この人なら自分を見てくれる、と。
その内に私は彼を好きになっていた。職場に恋愛を持ち込むのは…と自分でも思ったが、気持ちを抑えることなんてできなかった。
彼が喜べば私も嬉しかったし、気分転換にと彼が秘密で作って差し入れてくれる菓子は大好きだった。だから、私は彼のために歌い続けた。彼への想いを込めて。いつか気付いてくれたなら、という淡い期待を込めて。
だから、もう歌えないと言われて私は本当に目の前が真っ暗になった。

――もう、歌えない。

それは、もう彼と共に仕事をできないということ。彼の傍にいられないということ。彼に会えなくなるということ。

私は涙が枯れるまで泣いた。彼は優しく私の背を撫でてくれた。

しばらくして気持ちが落ち着き始め、しがみつくようにしていた身体を離した。彼は私の涙を拭ってくれ、何か言いたそうに口を薄く開いたが、少し考えて、懐から私と筆談する時に使っていたメモ帳を取り出してそこにさらさらと何かを書きつけると、それを私に押し付けるようにして渡して屋上から去っていった。

『好きだ』

それは、突然の告白だった。

私は枯れたはずの涙がまた溢れてくるのを抑えながらメモ帳を強く握って立ち上がった。目元を拭って階段を駆け下りる。彼へと続く、階段を。

◆◆◆

「そんなもの、まだ持っていたのか」

彼は私が手に持っているメモ帳を見てそう言った。

『思い出の品だから』

「お前なぁ…」

照れ臭いのか、彼は頭を掻きながら俯いてしまった。

『照れてるの？』

黙ってしまった彼に、私はくすりと笑った。

――こんな素直じゃない大人になっちゃいけませんよ、圭祐。

腕に抱えた赤ん坊を見ると、その赤ん坊は、眠いのだろう、瞼を閉じたり開いたりしながらこちらを見上げている。その様子が少し滑稽で、私はくすりと笑いを漏らしてしまった。

未だ黙っている彼を見て、変ってしまったなぁ、と思う。あの頃と比べると、雰囲気が大分大人びた気がする。少しばかり老けただろうか。いや、確実に老けたはずだ。

あれから私達は二人で同居生活を始め、翌年、婚約した。そして昨年、私は二度目の母親となった。

とん、と赤ん坊の背中を叩く。子守唄の一つでも歌ってやろうかと思って何か歌を思い出そうとして、一つのメロディーが頭を流れた。

それは昔、父がよく口ずさんでいた歌だった。

――あぁ、まだ覚えている。

今は何も聞こえなくなった耳にかつての音が蘇る。

無意識の内に口ずさんでいたようだ、うつらうつらとしていた赤ん坊はいつの間にか目を覚まし、リズムを取るようにぎこちなく揺

れながら、嬉しそうに口を開いていた。
くしゃりと笑顔になった赤ん坊にぽたり、と涙が落ちる。
私はまだ歌えるのだ、と。私は生きているのだ、と。
腕の中の赤ん坊に、既に失われた子の面影を重ねながら、言い表せない哀しみと表し尽くせない幸せとを感じて私は歌い続けた。

夢色ビーダマ（前書き）

文化祭で展示していたものです。

夢色ビーダマ

ぽろり、と涙が落ちる。

――俺は何で泣いているんだろう。

止めようと思っても次から次へと涙は溢れてきて止まらなかった。それと同時に、失われていたはずの記憶が戻ってくる。母の優しい歌声、父の作るアップルパイの香り。

――ああ、そうか。あの人達は…。

俺は、物心ついた時には孤児院で暮らしていた。捨て子だと囃され同じ孤児院の子供にいつもいじめられていた。

でも、今やっと思い出した。俺は、捨てられたんじゃない。

あれはクリスマスの日だった。クリスマスを楽しみにしていた俺は運悪く風邪で寝込んでしまった。三人で買い物に行くはずだったが、大事を取って俺は連れて行ってもらえなかった。

家に自分の息子を一人にしているものだから、心配で少しばかり車のスピードを出しすぎていたらしい。だから、反対車線から飲酒運転のトラックが突っ込んで来た時、避けることができなかったのだ。

現場は悲惨で、ガソリンを積んだトラックは横転、運転手は逃げ切ることができたが、俺の両親を乗せた車はドアが開かなくなり、遂に火の手が上がって、そのまま…。

俺のせいだ、と思った。俺が風邪をこじらせたりしなければ、親が

急ぐ必要はなかった。
俺は自分を責めて責めて責めまくり、電車の路線の上を通る歩道橋から飛び降りようとした。
その時、声が聞こえた。
死んじゃだめだ、と。生きろ、と。
俺はすぐに振り返ったがそこには誰もいなかった。そうこうしている内に駆けつけたお巡りさんに取り押さえられた。
そして、俺は孤児院に入れられた。その時にはもう、両親のことも、住んでいた家のことも、全てすっかり忘れていた。

やがて普通の会社員として働く傍ら趣味で写真を撮っていた俺は、同じ写真仲間とよく自分が撮った写真を見せ合ったりした。あそこを知ったのも、その内の一枚の写真からだ。
それは、山の麓にある廃墟で、被写体には打って付けの趣深い場所だった。俺が見つけたんだ、と威張っている友人に俺は思わず呆れ顔だったが、それも物ともせず、友人は話し続ける。

「そういえば、その廃墟の庭に小さな墓みたいのがあってさ。何故かそこに虹色のビー玉があったんだよな。」

――虹色の、ビー玉…。

何かが、引っかかった。
俺はそれを知っているような気がしたのだ。

「おい、その廃墟、何処にあったんだ」

◆◆◆

その廃屋は、街の外れにあった。辺りは荒廃していたが、その建物は意外にもしっかりしているのだろう、崩れる事無くその原形を保っていた。
どこか見覚えのある風景。俺は初めて来たはずなのに懐かしさを感じた。

――やっぱり、俺はこの家を知っている。

建物の周囲を歩いていると、友人が言っていた小さな墓を見つけた。

「これか…」

こんもりと盛られた土の上に二つの板が組み合わされ十字架のようになっているものが刺さり、そこには「ＪＵＮ」と書かれていた。その十字架の前にはキラキラと光るビー玉が置かれていて、そのビー玉は見る角度によってその色が変わるようだ。友人が『虹色』と言っていたのも頷けた。
そのビー玉に触ろうと腕を伸ばして、ふ、と一つの景色が脳裏に浮かんだ。それは段々と鮮明に、克明になっていき、やがて、蘇った。

それはまだ、俺が子供の頃。俺はさっきみたいに墓に置かれたビー玉を触ろうとして、母親に止められた。

「ねえ、どうしてさわっちゃいけないの？」

母さんはくすりと笑って意地悪そうに答えた。

「だって、圭祐は何でもお口に入れちゃうでしょう？」

つん、と俺の額を突いて、ふわりと笑った。

そして俺は、ずっと疑問に思っていたことを口にした。

「これ、だれのおはかなの？」

母さんは一瞬驚いたような顔をしてから、どこか哀しそうに優しく笑みながら言った。

「ここはね、大切な子のお墓なのよ」

そこまで思い出して、俺の意識は遠のいていき、気付けばあの白い海の中にいたのだ。

そうだ、思い出した。俺は昔に両親と住んでいた家を見つけたんだ。それで、自分の両親がどんな人だったのか、小さい頃の自分はどんな子供だったのか知りたくて、そこへ向かったんだ。

「もう、思い出しちゃった？」

思案している内に、いつの間にか例の青年が目の前まで来ていた。俺が飛び降りようと思った時に聞こえたのと同じ、声。母さんに似た、ふんわりとした栗毛の髪。父さんに似た、海のような、どこか青みがかった瞳。

俺は、気付いてしまった。あの墓が誰のものなのか。この青年が、何者なのか。

「兄、なのか」

小さく呟くと、潤は優しく微笑んだ。

「もう少し話したかったけど、もう時間だ。早くお帰り」

そう言うと、潤はその大きな手で俺の両目を覆った。

「待ってくれ、まだ――」

唐突に眠気に襲われ、俺は次第に眠りの底へと落ちていった。

「ごめんね」

◆◆◆

そこは、墓の前だった。

俺は地面に蹲ると、ありったけの涙を流した。

一段と暑く、いつもより蝉の声が大きく感じられる、夏の日の夕方だった。

◆◆◆

辺りも暗くなったので帰ろうと立ち上がると、かた、と何かが落ちた音がした。

愛用している、カメラだった。

――今日は置いてきたはずだったが…

帰って中身を確認してみると、撮った覚えのない写真が一枚。急いで現像して見てみると、そこには四人の人影が写っていた。圭祐はそれを見て驚いたように目を見開き、そして微笑んだ。

――神様のいたずらってやつかな。

そう言う潤の声が聞こえた気がした。

圭祐が写真を机の上に置いて部屋を出ていくと同時に、急に窓から風が吹いてきて、その写真はひらりと宙を舞うと床に落ちた。

そこには一人のパティシエと、一人の歌手と、二人の子供が幸せそうに笑っている様子が写っていた。

完

夢色ビーダマ（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1134o/

夢色ビーダマ

2010年10月10日10時21分発行